

2019年3月読書会

『羊と鋼の森』（宮下奈都）を読んで

『羊と鋼の森』（ひつじとはがねのもり）、一見するとミステリーのようなタイトルだが、これはピアノ調律師の物語である。2016年本屋大賞の受賞作だ。

舞台は北海道の小さな町、主人公は外村（とむら）という大人しく、取り立てて目立つ所のない青年。高校の体育館で偶然、板鳥（いたどり）という天才的な調律師と出会ったことが、彼の人生を立ち上げた。

板鳥の鳴らすピアノの音に、外村は森の匂いを思い起こし、懐かしい、何かとてもいいものが聞こえたように感じる。それが忘れられず、調律の専門学校に進み、板鳥の勤める楽器店で修行を始める。

それぞれスタイルを持つ先輩調律師たち、ピアニストを目指すことになる和音（かずね）とその双子の妹由仁（ゆに）、色々な要望を持つ顧客たち…周囲の人々と織りなす日々が温かく語られる一方、外村が自分自身を観察し、生き方を深く求めていく心の声が丁寧に綴られている。

物語は、外村が確かな、大きな一歩を踏み出したところで、希望に満ちたラストを迎える。

「昔は山も野原もよかったから」「昔の羊は山や野原でいい草を食べていたんでしょうね。」出会いの時、体育館のピアノを、古いけれどもやさしい音がすると言った板鳥の言葉だ。ピアノ内部の、鍵盤につながるハンマーの先、羊毛のフェルト部分の質がいいことを指している。「羊」のハンマーが「鋼」の弦を叩いて、音が出る。調律師が音色を作り上げるには、このフェルトの部分に、とても繊細な作業が必要なのだ。

「森」という言葉は、色々な意味に使われている。ハンマーと弦が整然と並ぶ、ピアノ内部の様子、外村にとって、生きていく場所となる調律の世界、また、ピアノの作る美しい世界…そして、外村が生まれ育った場所。外村は、高校に入学するために山を下りるまで、森を有する奥深い山の中で育ったのだ。

家の中に居場所を見つけられなかった彼は、森の中にいるときだけは、解放された気持ちになり、安心することができた。そこには木々の、実に様々に美しい姿があり、その木々が生み出す音、鳥の声、風の音などとともに、彼の内面の記憶となっていた。

ピアノに出会ってから、彼は世界のあらゆるところに、美しいものがひそんでいることに気づく。そして彼を包んでいた森の風景も、美しいと呼ぶことを知る。彼は、自分が美しいものをたくさん「知っていた」ことに気づくのだ。

「ピアノが、どこかに溶けている美しいものを取り出して耳に届く形にできる奇跡だとしたら、僕はよろこんでそのしもべになろう。」と彼は思う。

そして久しぶりに板島の調律を見た日、森の美しさを知っていたことが、美しいものが分かり、板島の作る音に魅かれ、導かれていることにつながったのだと気づく。

もう一つ、彼の人生を導いていくものが和音のピアノだ。その指先から生まれる類まれな音は、彼女がピアニストになると決意したことで、さらに光を放つ。その音色を人々に届けるため、彼女のピアノが十分に輝けるよう、自分はあらゆることをしよう、と外村も決意する。

私はこの本を読んで、外村という一人の青年の成長の物語であるには違いないが、「美」の女神に魅入られ、自分の使命を果たそうとする芸術家の物語のようにも感じた。

それに関して、例会で貴重なご意見をいただいた。

これは、仕事小説であると同時に、ロゴセラピーの小説なのだということである。

「ロゴセラピー」は、オーストリアの精神科医フランクルの提唱した心理療法。心の病を持つ患者が、自ら生きる意味を発見していくのを援助すること。

内向的な外村が、修行の日々の中で、周りの人々との交流を深めていくこと、また外村だけでなく他の人物においても、様々な「気づき」を重ねて自分の生き方を見出していく姿が描かれていることから、確かに、ロゴセラピーの小説と言えらると思う。作者の宮下奈都は上智大哲学科の卒業なので、何か関係があるのかもしれない。

宮下は、登場人物が日常を生きる様子を、温かく丁寧に描き出す作家として、定評がある。その柔らかい文章が魅力だというご感想もいただいた。

また他にも、内部の調整のみならず、ピアノの脚の向きを変えただけで音色が変わる、調律の繊細な世界を知れること、物語の始まりと終わりに「羊」に関するエピソードを置いた構成などが、よい点としてあげられた。

町の楽器店が4人もの調律師を抱えていること、人物が皆、善い人たちであることなど少し設定に現実離れしたところがあるというご指摘もあった。

この作品は、作者自身が長年頼んでいた調律師からの言葉…作者の古いピアノに対しての、「まだまだ大丈夫。中に良い羊がいるから」という言葉と、家族全員で行った、北海道トムラウシでの山村留学の日々が結実したものであるという。

メンバーの中に実際トムラウシの山に登った方がいらして、日本中で最も奥深いと言えるような山であること、非常に厳しい登山だったことも教えていただいた。

例会の場で、皆さんの様々な視点から改めて作品世界を見ることが出来、とても嬉しく思う。持参した、映画化された作品のDVDも、部分的だが一緒に鑑賞出来た。森林の映像がとても美しく、調律の場面は実際の様子がよく分かり、本の参考になる。また、作品の世界観もよく表現された映画だと思う。

2019年4月6日 加賀谷重矢